

令和4年度 建設環境常任委員会意見交換会報告書

開催日時	令和5年1月24日（火）午後6時～午後8時
開催場所	富士見市役所 全員協議会室、第1委員会室、第2委員会室
テーマ	富士見市の農業の目指すところと課題
出席議員	加賀奈々恵委員長 小川匠副委員長 小泉陽委員 尾崎孝好委員 篠原通裕委員 勝山祥委員
参加人数	参加者 13人（富士見市内の認定農業者） ※上記のほか、執行部職員4人が参加
実施内容	<p>進行：小川副委員長</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 開会 2 議長あいさつ 齊藤隆浩議長 3 委員長あいさつ・視察報告 加賀委員長 4 自己紹介 5 グループごとの意見交換 Aグループ（加賀委員長、尾崎委員、篠原委員） Bグループ（小川副委員長、小泉委員、勝山委員） 6 各グループの発表 7 副委員長あいさつ 小川副委員長 8 閉会 <p>議会事務局 吉田次長 幕田主任</p>

1 意見交換の概要

各グループにおける意見交換では、3つのテーマ（農業をはじめたきっかけ、農業の大変なところ、農業のやりがいや今後について）について質問し、参加者の方々に回答していただくことから始めた。

一通りお答えをいただいた上で、自由討論の後、富士見市の今後の農業について伺った。

<Aグループ>

①農業をはじめたきっかけ

ご参加いただいた認定農業者の方々の農業をはじめたきっかけは、全員家業が農家であるためとのことだった。学校卒業後すぐに農業を始めた方もいたが、ほとんどの方は民間企業等で働く経験をした後に就農したり、親の高齢化や家族の状況の変化がきっかけとなって家業である農業を継いだりしたとのことだった。中には企業勤めと農業を同時並行で始めたが、農作業をすることにより、もう一方の仕事のアイディアが湧きやすくなるに気づき、勤めながらの農業従事が良かったことを語る場面もあった。

②農業の大変なところ

営農で大変なことに関する見解は、経営面と環境面に大きく分けられた。経営面については税制、資材や燃料費の高騰、作物単価について語られた。税制については都市計画税、相続税の負担、さらに納税猶予特例や土地区分である生産緑地に関するルールなどに縛られている困難さが語られた。

最近の情勢としては物価が高騰し、燃料費、資材費に影響があり、国の支援が切れた後自立して採算を得ることができるのか不安がある。さらに、市場の生産者を守る機能は崩れてきており、格安の輸入品も影響し、買い叩かれ単価の維持に苦勞する。その他、経営規模に対し高価な農機具購入の負担も大きく、共同利用などの工夫が必要であることも話された。

税制に関しては、行政の農業者へ配慮のある政策改善を求める声があった。一方、市街地での営農は、土地が高く税も割高になるが、人を集めることができるというメリットもあることを述べる方もいた。単価については議論が深まり、農家は直売を含めたマーケットが必要であるのだという方向へ話題が進んだ。

環境面については、猛暑や寒冷などの自然環境の変化、除草作業、作物の病気について語られた。自然環境の変化は対処ができない側面がある。また除草は作業量が多い。農業は他にも多くの作業が必要である。そのような中、軽作業の労働も含め農福連携で進めている事例の紹介もあった。一方、農福連携の制度上のハードルの高さを訴える場面もあった。

その他、労働環境について、負担が大きいため働く人の健康に留意した、無理のない持続可能な農業を心がけているというご意見もあった。

③農業のやりがいや今後について

やりがいについては、自分の作った農作物に高評価の声をいただいたとき、人と人とのつながりを感じたとき、一年通してやり遂げた充実感についてお話しする方が多かった。また、企業や官庁などであれば組織の考えを最優先しなければならないが、今は自分で意思決定できるところにやりがいを感じるというご意見もあった。

高評価の声については消費者との会話の機会があったときや、純粹で忌憚のない言葉を発する子どもからの評価を得たときに喜びを感じるということが語られた。「この『おいしい』という価値観で商品が売れる、どんなに売り場が変わっても、これが食べ物の売れるルートの基本である」と実感のこもった言葉が印象的だった。

人と人とのつながりについては、家族、周辺住民、また農業学校からの研修生など一緒に働く人とのつながり、機会としての視点からは販売場所で生じる消費者とのつながり、農業体験でのつながりなどがある。農業体験では一般の方のほか、ボーイスカウトのエピソードが語られた。また、農業においてのつながりの中で「生きる」ということについて伝えることにより、楽しく農業ができるとのご意見があった。「最初に種があって水と太陽と土がそれぞれ作用し発芽していく。それは生きるということ。」との発言が、含蓄があり印象的だった。

また、多人数で営農をしている方にとっては皆の生活が懸かっていることに重責を感じる一方、困難を乗り越えて一年を通して農業をやり切ったという充実感がやりがいであるというご意見があり、複数の方が同趣旨のことを述べられた。

④富士見市の農業の将来について

一通り認定農業者の方々に発言をしていただいた後、富士見市の農業はどのようにしていけば良いかというご意見を伺ったところ、様々なお考えを伺うことができた。挙げられた複数の見解を次のように集約した。

- 先ほどやりがいとしても述べられていたが、人と人とのつながりを持つことを基本とするのは大事なことである。その一環として具体的には、農業体験や観光農業など市民の皆さんが農業について楽しいと感じていただける仕掛けが必要だ。そのような仕掛けを市で作ってほしい。さらにそのような仕掛けに関連し、特産品をつくり出すと良い。梨は環境や技術的に難易度が高いが、ミカンには可能性がある。それは人が集まることにつながる。
- 農業への関心づくりに関連し、県立ではあるが富士見市にある唯一の高校である富士見高校に農業科を創設すべきである。全員が進学のための教育ではなく、地域に根差した人材育成の選択もあるべきだ。
- 人を集める手法としてSNSの活用があるので、成功事例を紹介したい。気温が大変上昇した夏に、トウモロコシがしなびてきて商品として出荷できなくなった。そこでSNSを活用し、味は保証できないことを告知した

上で、格安料金でトウモロコシ狩りの来場を呼び掛けた。そうしたところ約300人が集まり、あっという間に1反のトウモロコシ畑の作物がきれいになくなった。さらにそのことが縁で翌年納得のいく作物ができたときにも来場していただき、「今度はおいしくできたね」とお声をいただくこともできた。

議論がさらに進み、これから農業を始める人にとってはチャンスであることについて語られた。農地を貸すと自身で営農しなくても農業による土地利用が認められ、納税猶予の特例を受けることができるため、今後は土地を買わずに借りながら営農する方が増えることが考えられるとのことだった。

また、若い人は例えばドローンを活用した営農など新しい技術を使うことにチャレンジしていくべきであるとも語られた。そのようなご意見がある一方、厳しい自然環境で一年の営農スタイルを構築するのは難しく、その中で新しいことへの挑戦はリスクも大きいというご意見もあった。

また、営農スタイル構築に関連し、卸先、販売先、すなわちマーケットについてご意見があった。農家には売り場がないが、農協や市場にのみ頼ってはられない事情もある。そうすると「直売」という言葉が一つのキーワードとなる。そこで、地産地消のメリットも考え、庭先の直売から規模を大きくした、産業団地の一面に道の駅をつくることはできないかというお話だった。たとえそれが大手スーパーの近くの立地にある販売所であっても、よく売れているという事例もある。農家が集まる場があれば人が集まるし、直売の可能性も広がるとのことだった。

また、直売所の議論に関連し、キラリ☆ふじみの駐車場でトラック市を開くことはできないかというご意見があった。休館日は駐車場スペースが開いているので農産品を持ち寄り直売する機会を設けてはどうかというご提案だった。月に1～2度で良いため、市で検討してほしいとのことだった。

< Bグループ >

①農業をはじめたきっかけ

参加いただいた方々の農業をはじめたきっかけは、代々続く農業を引き継いだことだった。農業をはじめた時点で家族が田畑を所有しており、学校卒業後すぐに農業をはじめた方がほとんどで、中には就職していたが家族の状況の変化をきっかけとして農業をはじめた方もいた。

②農業の大変なところ

農業の大変なところとして、大別すると、環境面、経済面そして経営面について語られた。

環境面としては、猛暑や降雪といった日々の天候の変化がある時季にも体調管理や設備維持に配慮しつつ対応する必要があること、良好な田畑の維持のための除草作業が必要なこと、有機栽培による収穫量が上げづらいこと、気候変動により経験が活かされない状況があること、農地売却により宅地造成されたところに転居してきた住民に農作業について理解してもらう必要があることと

いったことが語られた。

経済面としては、最近の情勢としての物価高騰により肥料や飼料が高騰していること、機械を導入することにより肉体労働が削減されるが、機械は高額であるため資金を用意する必要があることといったことが語られた。

経営面としては、最近の農業では利益を上げにくいこと、富士見市における農業規模では農業収入だけで生活するのは困難であることといったことが語られた。

③農業のやりがいや今後について

やりがいについては、直売所においては消費者が近くにおり農作物の生産者の顔を見せることができ、また購入者の顔が見えて声を聴けること、希望する価格で購入していただけること、自分で生産方法を見つけていけること、様々なことを試すことにより発見があること、作物が育っていくことがわが子のこのように楽しみであること、食べ物を作る技術を持っていることに胸を張っていけることといったことが語られた。

今後については、これまでやってきたのであるからこれからも続けていく考えであること、まだまだ伸びしろがあるので頑張っていきたいと考えていること、もう少し上手にできるようにしていきたいということ、利益は上がらなくても現状維持はしていくこと、後継者とともに働いていくこと、近隣住民とうまくやっていくことといったことが語られた。

④富士見市の農業の将来について

将来についての考えを伺った。不安なこととして後継者不足の問題が挙げられたほか、就農者数は減少傾向であり農地集積などを行っているが10年後にどうなっているのか不安に感じている、宅地開発により新たに転入してくる住民と減少している農家とが共存できるようにしていけることを望んでいる、農家の経営維持のため農家が利益を確保できる価格で販売できるよう購入者に価格に対する理解をしてもらう必要があるなどの話があった。また、自分の食べるものは自分で育てるという考えを浸透させ、家庭菜園として農地の開放をしていくことが望まれるといった話があった。

⑤その他意見

都市農業の維持は、自然や緑の保全のみならず、災害時には避難場所として活用できるなどといったことから、大切であることが語られた。東京都においては自然や緑を守るという観点から行政がバックアップしているので、富士見市においても守っていく政策の要望がなされた。

補助金等の申請手続は煩雑であるが、今回の富士見市の補助金の申請においては手続が簡素化されていたので今後も同様の方法で実施されるよう要望があった。

2 まとめ

以上が主な内容である。最後にこの意見交換会に対してのご意見として、「議論を交わすだけではなく実際に発展していくように行動してほしい。ただ活動しているそぶりだけになってはいけない。」という厳しいご意見もあった。一方「このような機会は今までなく、話し合いの機会が設けられたこと自体が価値のあることで、ありがたく感じている。可能ならまた開催してほしい。」との感想もいただくことができた。

実際に営農している認定農業者の生の声を聴くことは貴重であり、大変有意義だった。また、意見交換の中で伺った将来に向けてのアイデアは、これからの農業施策構築において多いに参考にすべきであると考えます。

今後は、今回の意見交換会でいただいたご意見を踏まえ委員会として何らかの行動を検討したい。